

変形性股関節症における機能予測の試み

An Attempt at Functional Prognosis in Coxarthrosis.

加藤 浩^{*,***} 神宮司 誠也^{**} 岩本 幸英^{**}
 Hiroshi KATO, RPT Seiya JINGUSHI, MD, PhD Yukihide IWAMOTO, MD, PhD

吉村 理^{****} 新小田 幸一^{****}
 Osamu YOSHIMURA, MD, PhD Koichi SHINKODA, RPT, Dr, Eng

1. 変形性股関節症を対象に、その股関節機能と障害構造の特徴について概説し、疼痛コントロールが股関節機能に及ぼす影響について述べた。
2. 変股症における中殿筋筋萎縮の特徴は、主に病期の進行に伴う type II 線維を優位とした廃用性筋萎縮であった。
3. そして、wavelet 変換を用いた EMG 周波数解析により中殿筋筋萎縮の評価が可能（歩行時の EMG から type II 線維の筋萎縮の程度の予測が可能）であった。
4. 身体運動は知覚系と運動系の神経系システムの相互作用によって初めて機能するものであり、両者のバランスが重要である。そのため動作改善を目的とした歩行練習では、単なる“walk”ではなく、踵接地・筋活動を意識させた（知覚情報システムの再形成を目指した）“gait”の指導が重要となる。

はじめに

現在、世界保健機関（WHO）は、「運動器の10年」（The Bone and Joint Decade 2000-2010）と題した世界運動を展開中である。そして、骨・関節疾患に対し、あらゆる専門分野の幅広い取り組みの必要性をアピールしている。“運動器”とは、四肢・体幹の骨格、関節、靭帯、筋、そして神経系で構成される組織・器官の総称¹⁾であり、言うまでもなく身体活動（生活動作）に最も影響を及ぼす器官系である。ここで重要なことは、運動器はこれら組織・器官の密接な連結のもとに機能しているということである。例えば、股関節疾

患に対し整形外科治療の一手段として手術療法が選択され、骨・関節機能の再建がなされても、運動器の回復としては不十分である。なぜなら、再建された骨・関節が実際に機能するには“筋”の働きが不可欠だからである。そこで、“筋”機能の障害構造を究明し、その回復過程を予測して適切にアプローチすることが、骨・関節疾患の治療成績を向上させる一つの鍵となるのである。理学療法士は、この“筋”機能改善に対するプロフェッションであることを宣言し、“運動器再生”に向けたあらゆる取り組みに挑戦していくことが求められている。

本稿では、変形性股関節症（以下、変股症）について、機能予測の側面から、その筋機能を中心にいくつか取り組むべき課題を述べる。

股関節機能と障害構造

日本整形外科学会股関節機能判定基準は股関節

*九州大学医学部附属病院リハビリテーション部
 (〒812-8582 福岡県福岡市東区馬出3-1-1)

**九州大学大学院医学研究院整形外科学分野

***広島大学大学院医学系研究科保健学専攻

****広島大学医学部保健学科